

平成 29 年 6 月 20 日現在

機関番号：13801

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25350721

研究課題名(和文) 体育教員における授業実践力の熟達化に寄与する「省察」の可視化と研修システムの研究

研究課題名(英文) A Study of In-Service Training System and the Visibility of "Reflection" that Contribute to Physical Educator's Proficiency in Teaching

研究代表者

新保 淳 (SHIMBO, ATSUSHI)

静岡大学・教育学部・教授

研究者番号：30187570

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円

研究成果の概要(和文)：体育教員が自らの授業実践力を熟達化していくためのシステムを開発するために、「省察の可視化」をどのように行うかという視点から研究を行うことによって、以下の研修システムを構想した。1) 授業構想時の思考プロセスを可視化した研修システム。2) 授業における「しかけ」が省察の素材として機能する研修システム

このような研修システムにおける「省察の可視化」は、「熟達」における「時間性の要求」および「多角的視点の要求」に応えられており、それらが組み込まれた研修システムを実行することによって、体育教員における授業実践力の熟達化が可能となりうることを明らかにした。

研究成果の概要(英文)：This study shaped a conception of in-service training system from a perspective of how to attain "the visibility of reflection" in order to develop a system for physical educator's proficiency in teaching. The system makes the thinking process of teaching plan visible (1), and functions as one in which "devices" in teaching work as materials for reflection (2).

It was clarified that physical educator's proficiency in teaching was available with using this in-service training system, in which "the visibility of reflection" corresponded to "the necessity of time" and "the necessity of multiple viewpoints" in proficiency.

研究分野：体育哲学

キーワード：省察の可視化 授業実践力 熟達化 時間性の要求

1. 研究開始当初の背景

「学校からの教育改革」が求められる中、反省的实践家としての教員像を現実化するためにもこれからの教員には、普段の授業実践から「授業構想(Plan)」「授業展開(Do)」「授業省察(Check)」「再デザイン(授業改善:Action)」のいわゆるPDCAのサイクルに基づいて授業実践を行う自立した教員像が求められていた。しかしながら、PDCAサイクルの中でも、C A P Dの時間の確保と質的な保障がないこと、授業省察から再デザインの過程が各教員に委ねられ、他者の視点が入りにくいこと、授業省察から再デザインの過程に対して、自らの授業実践力の向上を自覚化するものになっていないこと等の学校現場が現実的に抱える問題も、無視することはできない。問題は、授業経験が豊富な教員ほど、授業展開から授業省察そして再デザインの過程は、個々の教員の経験の中に埋め込まれており、時間が無いが故になかなか可視化されないということである。この可視化されていない部分の掘り起こしをいかに行き、それをどのようにして実行性のあるものにするかは、教員自らの課題を明確化するためにも、また、教員が自らの授業実践力の熟達化を進めていくためにも重要である。さらにこのプロセスの可視化は、初任者や経験の浅い若手教員といった教職生活のスタート近辺に存在する「未熟練者」にとっても、大きな資源になりうると考えられる。

2. 研究の目的

本研究の目的は、保健体育科における教員が自らの授業実践力を熟達化していくためのシステムを開発することにある。

3. 研究の方法

まず、教員が反省的实践家として自立することを促すための「省察」を中核とする授業実践力の向上に資する方法論、中でも授業と授業をつなぐ「省察」の可視化を促すリフレクションシートの開発とその利用システムを開発することが必要となる。例えば鹿毛の「しかけ論」から導き出した「リフレクションシート」の記入原則を視点とし、利便性の高いリフレクションシートを考案する。そこに、体育の実技授業特有のグループ編成や練習場所、それらの活用順序等々をどのように用いるかという「場」の利用を加え、小学校において教員に「省察」の実施を依頼し、体育教員のリフレクションシート活用とそれに対する意見を収集する。

さらには、研究授業を実施するまでに至る指導案の作成過程(実際は、指導案ファイル)を時系列的の一つひとつ残すことから、「熟達」した体育教員の思考過程を可視化する。

4. 研究成果

体育教員が自らの授業実践力を熟達化していくためのシステムを開発するために、「省察の可視化」をどのように行うかという視点から研究を行うことによって、以下の研修システムを構想した。

(1) 授業構想時の思考プロセスを可視化した研修システム:

実行性の高いリフレクションシートのプロトタイプを作成し、授業構想の予測と実践の現実の差異について記述するリフレクションシートをアーカイブ化することで「個々の教員の経験の中に埋め込まれた実践の知」の可視化を実現した。

具体的には、教員の思考プロセスを授業構想のリフレクションシートを用いることによって、自らの授業構想における「予測」と授業実践という「現実」の観察結果の差異について授業者が書き込んでいく方法を明らかにした。さらには、保健体育科という教科における特殊性(体育の実技授業特有のグループ編成や練習場所、それらの活用順序等々)を加えた考察を行うとともに、それらの資料(シート)をアーカイブ化することの意義、体育教員の授業実践力向上に対する効果について明確化した。つまり、リフレクションシートをアーカイブ化するということは、授業リフレクションシートを一時間一時間、一枚一枚残すことが「個々の教員の経験の中に埋め込まれた実践の知」の可視化になるということである。

これらのことは、リフレクションシートをアーカイブ化したり、思考プロセスを可視化したりすることに直接関わる授業者本人はもちろんのこと、のちにそれを参考にすることができる教職経験の浅い教員にとっても、授業実践力の熟達化に寄与する研修システムの一部として機能することを提示した。

さらには、学習指導案作成過程に着目し、教員歴21年目、附属学校赴任1年目である授業者の7回にわたる指導案修正における修正内容とその修正意図を分析することで授業構想時の思考プロセスを可視化した。

(2) 授業における「しかけ」が省察の素材として機能する研修システム:

小学校の授業実践に新たな教具(iPad)を導入したことで、教員歴20年目の中堅授業者の授業観察の視点を再確認でき、単元計画を再構成し、実際の授業においてそれを修正しながら授業を展開する様子、つまり単元レベルおよび授業レベルのPDCAサイクルの実践を観察した。これらを検証するために、授業者への半構造化インタビューを実施し、授業者の「しかけ」の可視化を実現した。ここでみられた一連のしかけは、鹿毛の「しかけ論」を踏まえれば、授業構想時におけるしかけづくり、授業実践時における教育的瞬間を捉えたしかけ直しやしかけ化であった。このように本研究では、しかけが「省察」の素材

として機能することが明らかとなり、「しかけ論」を用いた研修システムを提示した。

以上のような研修システムにおける「省察の可視化」は、「熟達」における「時間性の要求」および「多角的視点の要求」に応えられており、それらが組み込まれた研修システムを実行することによって、体育教員における授業実践力の熟達化が可能となりうることを明らかにした。

(3) 「熟達化」と「時間性の要求」について

ハワイ大学の教員養成機関(大学院)では、院生たちがコホートを形成して、3年計画で、あるいは修了後においても授業および研究を進めている実態を確認した。ここで特筆すべきは、このコースでは、熟達という概念そのものが持つ「時間性の要求」「多角的視点の要求」に応える指導体制を整備していたことである。樋口が「教師の資質・能力の熟達化」について「それは時熟でもある」と指摘しているように、熟達における「時間性の要求」は、本研究のキーワードでもある教員の授業実践力の「熟達化」においても例外ではない。そこには即効性のある特効薬など決して存在しない。時間がかかると自覚しつつ、よりよい体育授業研究を実践するなかで、体育教員における授業実践力の「熟達化」を図るのである。

このような意図を持って本研究で実施してきたさまざまな省察の可視化は、熟達における「多角的視点の要求」にも応えるべく行われてきた。つまり、省察の可視化が、さまざまな経験知を持つ多くの教員による、それぞれの視点からの討論を可能とし、さらにそのような討論がなされることによって、授業者や討論参加者への有益なフィードバックを可能とするのである。したがって、授業研究における省察、そしてその可視化には、これまでよりも時間や労力をかけて取り組むべきであり、教職に関わる全ての人がこのような価値観を共有することが必要である。

本研究で実施してきたさまざまな省察の可視化は、熟達における「時間性の要求」「多角的視点の要求」に応えられており、それらが組み込まれた研修システムの実行によって、体育教員における授業実践力の「熟達化」が可能になると考えられる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計9件)

(1) 体育教員における授業実践力の熟達化に寄与する省察の可視化と研修システムの総括と今後の課題
常葉大学経営学部紀要、第4巻第2号、平成29年2月、pp.51-57. 査読有
高根信吾、新保 淳

(2) スポーツ科学論のゆくえ
現代スポーツ評論、第34号、平成28年5月、pp.51-62. 査読無
樋口 聡

(3) 米国における Doctor of Education プログラムとの比較から見える共同教科開発学の特性
教科開発学論集、第4号、平成28年3月、pp.185-191. 査読有
新保 淳、高根信吾、長倉 守、白畑知彦

(4) 体育教員における授業構想の思考プロセスの可視化に関する研究 - 附属学校赴任1年目のベテラン教師に着目して -
静岡大学教育実践総合センター紀要、第25号、平成28年3月、pp.93-106. 査読有
野津一浩、牧澤利光、新保 淳

(5) 小学校体育科における児童の学習効果向上および教員の授業実践力熟達化に寄与する iPad の使用方法に関する研究 - 4年生の「走り高跳び」を事例として -
常葉大学経営学部紀要、第3巻第1号、平成27年9月、pp.83-89. 査読有
高根信吾、三澤宏次、新保 淳

(6) 省察を中核とした授業実践力向上のための方法論に関する研究(2) - アクション・リサーチによる教師の変容 -
教科開発学論集、第3号、平成27年3月、pp.139-149. 査読有
長倉 守、新保 淳

(7) 体育教員における授業リフレクションの可視化の方法とそれらのアーカイブ化の意義に関する研究
静岡大学教育学部研究報告(教科教育学篇)、第46号、平成27年3月、pp.193-203. 査読有
新保 淳、野津一浩、高根信吾

(8) 「学び続ける教員像」確立のために求められるリフレクションに関する研究(1)
常葉大学保育学部紀要、第1号、平成26年2月、pp.95-108. 査読有
高根信吾、三澤宏次、新保 淳

(9) 「身体知」は体育をどう変えるか?
体育科教育、第61巻第9号、平成25年9月、p.9. 査読無
樋口 聡

[学会発表](計 0件)

[図書](計 0件)

[産業財産権]

出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6．研究組織

(1)研究代表者

新保 淳 (SHIMBO,ATSUSHI)
静岡大学・教育学部・教授
研究者番号：30187570

(2)研究分担者

樋口 聡 (HIGUCHI,SATOSHI)
広島大学・教育学研究科・教授
研究者番号：30173157

(3)研究分担者

高根 信吾 (TAKANE,SHINGO)
常葉大学・経営学部・准教授
研究者番号：70440609